



美 術 館 は  
ぼ くら の  
宝 箱

子どもと  
楽しむための  
ガイドブック

## それぞれの人の大切な「宝箱」に

美術館は誰でも開くことのできる宝箱です。

ふたをあけると、

何かを思い出して幸せな気持ちになったり、

逆に心揺さぶられたり、

それぞれの想いを自由に巡らすきっかけとなる・・・

美術館は

そんな「宝箱」のような

存在になれればと考えています。

「美術館はどんなところ？」と子どもたちに聞くと、大抵「絵のたくさんあるところ」という答えが返ってきます。では「病院はどんなところ？」と聞かれたらどうでしょう。「病気を治してくれるところ」と答えるのではないのでしょうか。病院は自分の身に起こることとつなげて考えられているのです。確かに美術館には絵がたくさんありますが、その絵を人々の心に届け「心を生き生きさせる」ための場所ではなくてはなりません。美術館も「リフレッシュできる場所」「静かにひとりの時間を楽しむところ」「好奇心を満たすところ」というふうに、人の気持ちと結びつきのある場所として、心のなかに宿っていくことを願っています。

神奈川県立近代美術館は、これまで「Museum Box 宝箱」という美術館体験キットや所蔵品のポケットガイドなどを通して、美術館に親しみきっかけ作りをしてきました。そうしたなかで、少しずつ小・中・高校生やもっと小さな子どもたちとの交流が広がってきたのです。この小さな冊子は、その交流のなかで出会った人々との時間を振り返って、子どもたちの感想から言葉を借りながら、子どもたちと美術館を楽しむための要点をまとめたものです。

## ゆっくりと扉を開いて

私は、美術館に行ったことはあるけれど、  
あまり良い印象が残っているわけでもなく、  
今日この美術館に来ました。

そして今日美術館がとつてもとつても好きになりました。  
今度、家族皆に「美術館ってこんなに心がほかほかして、  
たとえ相手にあっていなくても、話をしていなくても  
相手がどのような気持ちでいたかがわかる」ってことを  
教えてあげたい。

(小学4年、A.0)

美術館は絵や彫刻などを「見ること」を通して、人間やこの世界のこ  
とに考えを巡らす場所です。多くの大人は、子どもは深く考える知識  
も経験もまだ少なく、美術館をあまり楽しめないと思うかもしれませんが  
。しかし、逆に子どもたちは知識や経験が少ない代わりに、自分の感  
覚に正直に「今見えているもの」から想像を広げて楽しむことができ  
ます。その点では大人も教わるところがあるくらいです。でも、まだ慣  
れない子どもたちと来館する時はぜひ少し準備をしてください。

- 1：美術館に行くことを事前に話す。
- 2：どんな体験ができるのかを伝える。
- 3：美術館でのルールについて話す。

たとえば、子どもたちと先生が美術館に来る時には、前もって美術館  
の絵地図やルールブック、展覧会のポスターなどを送り、教室に貼っ  
てもらっています。そうして美術館で見る絵や美術館の建物を目にし  
ていると、それだけで気持ちのどこかで美術館とつながり始めるので  
す。また、子どもたちは大人から美術館はどんなところで、どのように  
楽しめるのかを聞くと、美術館での時間を想像し始めます。そうす  
ると実際に美術館に来た時の子どもたちの心持ちはずいぶん変わっ  
てくるのです。紹介した感想を書いた4年生は、学校で「Museum Box 宝  
箱」で遊んで、その後に美術館に来たので、展示されている絵とじっ  
くり対話することができたようです。美術館への扉はゆっくりと開いて  
ください。そして「心がほかほかする」美術館体験を導いてください。

## 心落ち着ける空間をもつ

5年生の時、  
始めて授業で美術館に行くことになったときは戸惑った。  
なぜなら美術館って「大人」の入る場所でしょ？  
そして9月のお弁当の日、クラスで鎌倉館に出かけた。  
入り口では少し戸惑ったものの、  
中に入ってみると、いつも友達と一緒に私も  
なんか「ひとり」になれる気がした。  
やっぱりそうだった。  
静かに絵を見るなんてつまらないと思う反面、  
ドキドキ、ワクワク胸が高まる。  
「ひとりっていいかも・・・」  
「落ち着ける・・・」  
「なんか、美術館って子供の私でも楽しめるよ」と、  
私は思った。

(中学1年、アレン)

大きな部屋に、普段は見ることのない作品が並んでいる美術館。子どもだけでなく、大人でも久しぶりの美術館は少し緊張するものです。それは美術館にはたくさんのエネルギーが詰まった絵や彫刻があって、展示室ではその作品から見えないエネルギーをシャワーのように浴びるからかもしれません。美術館は心地良い緊張感がある場所です。

美術館に行く日のことを少し前から想像し始めていると、子どもたちの緊張感は「ドキドキワクワク」と良いものにつながりやすくなります。突然その日がやって来て心の準備ができていないと、緊張を取り払うかのように、無駄なおしゃべりをして作品をじっくり見ることができなくなります。展示室では、10歳ぐらいまでの子どもなら、大人が寄り添って、文字のない絵本と一緒に読むように心が落ち着くリズムをつくってあげてください。もう少し年齢が高い学年の団体での見学ならば、なるべく普段一緒にいる友達と離れてそれぞれがひとりになれる状況をつくった方が、自分の気持ちを解放して絵と対話しやすくなるようです。絵を見るのは新しい友達をつくる時と同じような感覚で、気になる絵とはじっくりと話して、ちょっと気が合わないと思う作品は通り過ぎて良いのです。心落ち着いて作品を見るのが面白い、と思える体験を引き出してください。

## 子どもの鑑賞ジャンプ力

絵は目だけで見るのではなく、耳やはなでもみると、  
びじゅつかんのたのしさがわかるとおもいます。  
でもたのしいといっても、わらったり、  
あそんだりしたときのたのしさではなく、  
びじゅつかんだけのたのしさです。

(中略)

わたしがびじゅつかんでやってみたいことは、  
てんじされている絵のせかいには行ってみたいです。

(小学2年、かのは)

小さな子どもと一緒に絵本を読むと、食べ物が出てくれば食べるまねをしたり、においがするような場面では鼻をくんくんとさせたりして、絵本の世界に入って楽しめます。仕草をすることで、より想像が広がるのでしょうか。美術館でも、子どもたちは絵の知識が全くなくても、目に見えているものから想像を広げていきます。作品の見方にはたったひとつの正しい答えはありません。作品を見ながら、自分の心のなかで起こる意外な想像に驚いたり、新しい世界を見つけていくことに創造性と楽しさがあります。作品を見ながら、自分のなかでさまざまなことを組み立て直す作業は、手で具体的に何かをつくり出すのと同

じくくらいに、とても創造的な行為です。

子どもたちには「鑑賞ジャンプ力」とでもいうような、しなやかな鑑賞能力があります。大人がつい見逃すようなことに気づき、発想することができます。ですから大人は作品と子どものあいだに起こる「見て考える力」の相互作用を信頼して、絵の知識を教えるよりも、絵とじっくり対話できる状況をつくり出すことを大切にしてください。目に見えるものから想像を巡らすこと、これは誰もが小さい頃からしていることではないでしょうか。有名な絵を前にしても想像を巡らす方法は同じです。子どもが絵の世界にポンとジャンプして入っていく通路を閉じないようにして、絵のなかを散歩する時間をあげてください。子どもの視点に刺激されて大人も一緒に絵のなかを散歩し、「何が見える？」と言葉のキャッチボールが始まれば、鑑賞することがもっと楽しくなります。気をつけなければならないのは、子どもは何かを見つけていても「求められている答え」ではないと思って言葉にしないことがあるので、心に浮かんだことを言葉にしていという雰囲気をつくり、その楽しさを伝えてください。心に浮かんだ思いを自分でも肯定し、相手にも受けとめられて会話が進むと、鑑賞の視点が広がり深まり、今見えているものから感じることは人それぞれが違うことに気づき、絵を見ることを通して大人も子どもも自分の視点を広げるきっかけとなります。

